



夏本番の御陵園
メハジキの花が、
元気に咲いています。

メハジキ

Leonurus japonicus Houttuyn (シソ科)

メハジキの花

夏になると、御陵園の桃の木の下にはメヒシバやエノコログサなどイネ科の植物が生い茂ります。それらの草に紛れてメハジキが生えていることがあります。以前近くに植えていたメハジキからこぼれた種が芽生え、育ったものです。

メハジキはシソ科の2年草で、東アジア各地や日本に自生しています。日本では原っぱや河川敷の草地に生えているのを見かけます。

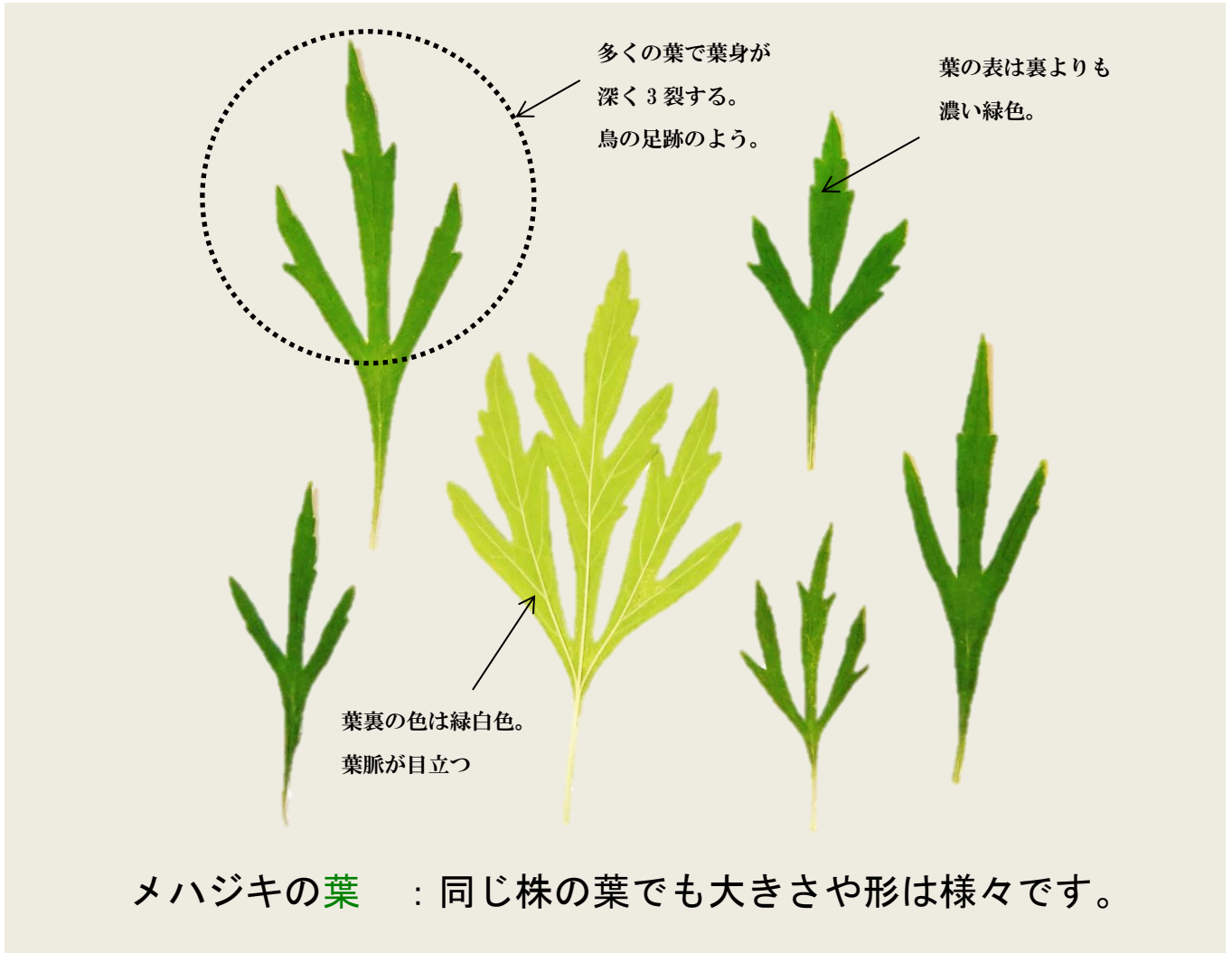
花期の地上部が益母草(ヤクモソウ)という生薬になり、主に産後の出血や月経不順などに対して用いられます。

「母の益になる草」という意味が生薬名の由来になっていると言われています。

梅雨から夏にかけてぐんぐん大きくなり、御陵園では草丈が150 cmくらいになることもあります。そして、6月の中旬には桃色の花を咲かせます。



メハジキをじっくり観察してみましょう。



茎には窪みがある。

メハジキの茎

茎は四角柱状をしており、くっきりとした縦筋の窪みと短毛があるのが特徴です。



メハジキの花

夏に桃色の唇形花を咲かせます。1つの節に花が、ぐるりと輪生します。花の大きさは8mmほど。



PHOTO GALLERY



— 観察できる花々 —



シヨウズク (シヨウガ科)

果実が小豆蔻(シヨウズク)という生薬になる。芳香性健胃薬や香辛料(カルダモン)として用いられる。



キキョウ (キキョウ科)

根が桔梗(キキョウ)という生薬になる。鎮咳・去痰に用いられる。東アジアに分布する多年草。秋の七草の一つ。



オオボウシバナ (ツユクサ科)

花が友禅染の下絵を描く際に用いられる「青花紙」の原料となる。ツユクサ科の一年草で、滋賀県草津市で栽培される。



ムラサキバレンギク (キク科)

開花期の地上部が免疫賦活作用のある生薬として用いられる。北アメリカ原産の多年草。



ハトムギ (イネ科)

種皮を除いた種子が薏苡仁(ヨクイニン)という生薬になる。民間薬として、いぼ取りや肌の美容を目的に使用される。



ゴマ (ゴマ科)

種子が胡麻(ゴマ)という生薬になる。滋養強壮、解毒に用いられる。世界各地で栽培される一年草。



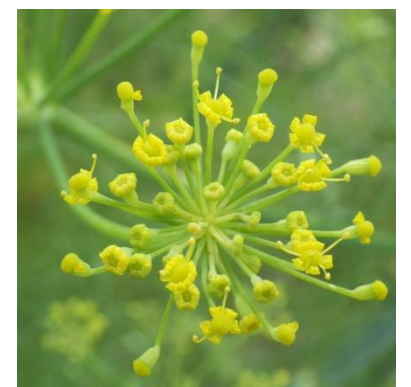
オニユリ (ユリ科)

鱗片葉が百合(ビヤクゴウ)という生薬になる。消炎、鎮咳、鎮静などに用いられる。日本の草地にも自生している多年草。



コエンドロ (セリ科)

果実が胡荽子(コズイシ)という生薬になる。健胃、駆風に用いられ、香辛料(コリアンダー)として用いられる。地中海沿岸地域原産の一年草。



ウイキョウ (セリ科)

果実が茴香(ウイキョウ)という生薬になる。芳香性健胃、駆風に用いられる。フェンネルという香辛料にもなる。地中海沿岸地域原産の多年草。